

〈研修報告〉

令和六年度夏季研修会報告

福岡講倫館高校 大塚 幸子

令和六年七月三十一日（水）、宗像ユリックスにて令和六年度高等学校書道教育研究部会の夏季研修会及び、授業作品展選出会が行われた。参加校は六十三校、参加者は五十六人であった。

〈授業作品展選出会・鑑賞会・情報交換〉

選出会は班ごとに分かれ、それぞれの班でどのような道具を使用していいのかなど意見を交わしながら行うことができ、有意義な時間となった。鑑賞会では、漢字仮名交じり書の作品が年々増えてきていることを先輩教員の先生方が話す姿や、地区ごとの作品の特色などを若手の教員同士で鑑賞し合い、話の弾む場面も見られた。私自身も授業展開や授業成果としての作品の在り方について得るものが多かったように感じている。

四地区が一緒になって授業作品展の選出会が行われるようになり数年が経つが、全ての選出作品が決定した鑑賞会は、生徒の個性はもちろん、作品そのものから各学校での先生方と生徒の生きた授業風景を垣間見ることのできる機会であるように感じている。この場に生徒がいたら、きっと私たち教員以上に感動するだろうと思った。今後より充実したものとなるよう、研鑽を積んでいきたいと決意を新たにした。

〈講演・研修〉

午後からの講演会と研修会のうち、講演会では、福岡県教育庁教育振興

部高校教育課より、高口盛幸指導主事をお招きし、「生徒の学習改善につながるループリック」の講演が行われた。学習指導要領における芸術科書道の内容、「生きる力」の理念について、「書道Ⅰ」「書道Ⅱ」「書道Ⅲ」の内容を比較しながら、まだまだ読み込めていないことを実感しつつ発見や学びの多い講演会であった。

特に、旧の学習指導要領と現行の学習指導要領における「観点別評価」については、「観点」と「育成すべき資質・能力」の違いを教員が明確に理解し、「教科の目標」を据えることの重要性について考えさせられる場面があった。また、「指導と評価の一体化」の考えに基づく学習評価及び教育課程の編成については、本講演で学んだものを各自が自校に持ち帰り各校で検討していく必要性もあると考えた。

その後の研修会では、昨年に引き続き班ごとに「ループリック」の検討会を行った。私自身のことを例に挙げると、自校の芸術科の教員間で「日頃の指導の中でいかに教員側が抽象的な言葉に頼っているか」という話題が出ることがある。今回、夏季研修会でループリックを検討していく中でも、「抽象的な言葉」を「明確に言語化する」ということの難しさを感じた。「指導と評価の一体化」のためにも、授業展開を考える段階で、生徒に伝わりやすい言語で明確に評価の観点や規準を示すことができるように今後も学び続けることが必要不可欠だと考える。

最後に、非常に充実した研修会に参加できたことを、心からお礼申し上げます。報告とする。